

## 校異源氏物語・花のえん

きさらきのはつかあまり南殿のさくらの宴せさせ給后春宮の御つほね左右にし  
てまうのほりたまふ弘徽殿の女御中宮のかくておはするを折ふしことにやすか  
らすおほせどものみにはえすくし給はてまいり給日いとよくはれて空のけしき  
鳥のこゑも心ちよけなるにみこたちかむたちめよりはしめてその道のはみなた  
むるむ給はりてふみつくり給ふ宰相中将春といふもし給はれりとの給ふこゑさ  
へれいの人にことなりつきに頭中将人のめうつしもたゝならすおほゆへかめれ  
といとめやすくもてしつめてこはつかひなどものくくしくくれたりさての人  
くはみなをくしかちにはなしろめるおほかり地下の人はましてみかと春宮の  
御さえかしこくすくれておはしますかゝるかたにやむことなき人おほくものし  
給ふころなるにはつかしくはるくくともりなきにはにたちいつるほとはした  
なくてやすき事なれとくるしけなりとしおいたるはかせどものなりあやしくや  
つれてれいなれたるもあはれにさまく御らんするなむおかしかりけるかくと  
もなどはさらにもいはすととのへさせ給へりやうく入日になるほと春の鶯さ  
へつるといふまひいとおもしろくみゆるに源氏の御もみちの賀のおりおほしい  
てられて春宮かさしたまはせてせちにせめのたまはするにのかれかたくてたち  
てのとかにそてかへすところをひとをれけしきはかりまひ給へるににるへきも  
のなくみゆ左のおとゝうらめしさもわすれて涙をとし給ふ頭中将いつらおそし  
とあれは柳花園といふまひをこれはいますこしすくしてかゝる事もやと心つか  
ひやしけむいとおもしろければ御そ給はりていとめつらしき事に人をもへりか  
むたちめみなみたれてまひ給へと夜に入てはことにけちめもみえすふみなとか  
うするにも源氏の君の御をはかうしもえよみやすくことにすしのゝしるはか  
せどもの心にもいみしうおもへりかうやうのおりにもまつこの君をひかりにし  
たまへれはみかともいけてかをろかにおほされん中宮御めのとまるにつけて春  
宮の女御のあなかちににくみ給らむもあやしうわかかうおもふも心うしとそみ  
つからおほしかへされける

おほかたに花のすかたをみましかは露も心のおかれましやは御心のうちな  
りけんこといかてもりにけむ夜いたうふけてなむことはてける上達部をのをの

あかれ后春宮かへらせ給ひぬれはのとやかになりぬるに月いとあかうさしいて  
ゝおかしきを源氏の君ゑい心ちにみすくしかたくおほえ給ひけれはうへの人  
くもうちやすみてかやうに思ひかけぬほともしさりぬへきひまもやあると  
ふちつほわたりをわりなふしのひてうかゝひありけとかたらふへきとくちもさ  
してけれはうなけきてなをあらしに弘徽殿のほそとのにたちより給へれは三  
のくちあきたり女御はうへの御つほねにやかてまうのほり給にけれは人すくな  
ゝるけはひなりおくのくるゝともあきて人をともせずかやうにて世中のあやま  
ちはするそかしと思ひてやをらのほりてのそき給人はみなねたるへしいとわか  
うおかしけなるこゑのなへての人とはきこえぬおほる月夜ににるものそなきと  
うちすしてこなたさまにはくるものかいとうれしくてふと袖をとらへたまふ女  
おそろしと思へるけしきにてあなむくつけこはたそとの給へとなにかうとまし  
きとて

ふかき夜のあはれをしるも入月のおほろけならぬ契とそおもふとてやをら  
いたきおろしてとはをしたてつあさましきにあきたるさまいとなつかしうお  
かしけなりわなゝくゝこゝに人とのたまへとまろはみな人にゆるされたれは  
めしよせたりともなむてう事かあらんたゝしのひてこそとの給ふこゑにこのき  
みなりけりときゝさためていささかなくさめけりわひしとおもへるものからな  
さけなくこわくしうはみえしとおもへりゑい心ちやれいならさりけむゆるさ  
ん事はくちおしきに女もわかうたをやきてつよき心もしらぬなるへしらうたし  
とみ給ふにほとなくあけゆけは心あはたゝし女はましてさまゝにおもひみた  
れたるけしきなり猶なのりしたまへいかてきこゆへきかうてやみなむとはさり  
ともおほされしとの給へは

うき身世にやかてきえなはたつねても草のはらはとはしとやおもふとい  
ふさまえむになまめきたりことはりやきこえたかへたるものかなとて

いつれそと露のやとりをわかむまにこさゝかはらにかせもこそふけわつら  
はしくおほす事ならすはなにかつゝまむもしすかい給ふかともいひあへす人  
くおきさはきうへの御つほねにまひりちかふけしきとしけくまよへはいと  
はりなくてあふきはかりをしるしにとりかへていて給ひぬきりつほには人く  
おほくさふらひておとろきたるもあれはかゝるをさまたゆみなき御しのひあり  
きかなとつきしろひつゝそらねをそしあへるいり給ひてふし給へれとねいられ  
すおかしかりつる人のさまかな女御の御おとうとたちにこそはあらめまた世に  
なれぬは五六の君ならんかしそちの宮の北の方頭中将のすさめぬ四の君なとこ

そよしとき、しかなかく、それならましかはいますこしおかしからまし六は春宮にたてまつらんと心さし給へるをいとおしうもあるへいかなわつらはしうたつねむ程もまきはしさてたえなむとはおもはぬけしきなりつるをいかなれはことかよはすへきさまを、しへすなりぬらんなどよろつにおもふも心のとまるなるへしかうやうなるにつけてもまつかのわたりのありさまのこよなうおくまりたるはやとありかたふおもひくらへられ給ふその日は後宴の事ありてまきれくらしたまひつさうのことつかうまつり給きのふの事よりもなまめかしうおもしろしふちつほはあかつきにまうのほり給にけりかのありあけてやしぬらんと心も空にておもひいたらぬくまなきよしきよこれみつをつけてうか、はせ給ければおまへよりまかて給ひけるほとにた、いま北のちんよりかねてよりかくれたちて侍つる車ともまかりいつる御かたのさと人侍へる中に四位の少将右中弁などいそぎいててをくりし侍へるや弘徽殿の御あかれならんとみ給へつるけしうはあらぬけはひともしるくくるまみつはかり侍つときこゆるにもむねうちつふれ給ふいかにしていつれとしらむち、おと、なとき、てことくしうもてなさんいかにそやまた人のありさまよくみさためぬほとはわつらはしかるへしきりとてしらてあらんはたいとくちおしかるへければいかにせましとおほしわつらひてつくくとなかめふし給へりひめ君いかにつれくならんひころになれはくしてやあらむとらうたくおほしやるかのしるしのあふきはさくらかさねにてこきかたにかすめる月をかきて水にうつしたる心はへめなれたる事なれとゆへなつかしうもてならしたりくさのはらをはといひしさまのみ心にかゝり給へは

世にしらぬ心ちこそすれ有明の月のゆくゑをそらにまかへてとかきつけ給ひてをき給へりおほいどのにもひさしうなりにけるとおほせとわか君も心くるしければこしらへむとおほして二条院へおはしぬみるまゝにいとうつくしけにおひなりてあいきやうつきらうくしき心はえいとなりあかぬ所なうわか御心のまゝにをしへなさんとおほすにかなひぬへしおとこの御をしへなれはすこし人なれたる事やましらむとおもふこそうしろめたけれ日ころの御ものかたり御ことなどをしへくらしていて給ふをれいのとくちおしうおほせといまはいとうならはされてわりなくはしたひまつはさすおほいどのにはれいのふともたいめんしたまはすつれくとうよろつおほしめくらされてさうの御ことまさくりてやはらかにぬる夜はなくてとうたひ給おと、わたり給ひて一日のけふありし事きこえ給ふこゝらのよはひにてめいわうの御代四代をなんみ侍ぬれとこの

たひのやうにふみともきやうさくにまひかくものゝねともとのほりてよはひ  
のふる事なむ侍らさりつる道くのもの上手ともおほかるころをひくはしう  
しろしめしとゝのへさせ給へるけなりおきなもほとほとまひいてぬへき心ちな  
んし侍しときこえ給へはことにとゝのへおこなふ事も侍らすたゝおほやけ事に  
そしうなるものゝしともをこゝかしこにたつね侍しなりよろつのことよりは柳  
花園まことにこうたいのれいともなりぬへくみたまへしにましてさかゆくはる  
にたちいてさせ給へましかは世のめんほくにや侍らましときこえ給ふ弁中将な  
とまいりあひてかうらむにせなかをしつゝとりくものにねともしらへあは  
せてあそひ給ふいとおもしろしかのありあけの君ははかなかりし夢をおほしい  
てゝいともなけかしうななめ給ふ春宮には卯月はかりとおほしさためたれは  
いとわりなうおほしみたれたるをおとこもたつね給はむにあとはかなくはあら  
ねといつれともしらてことにゆるし給はぬあたりにかかつらはむも人わるくお  
もひわつらひ給ふにやよひの廿余日右大殿のゆみのけちにかむたちめみこたち  
おほくつとへ給てやかてふちの宴し給ふ花さかりはすきにたるをほかのちりな  
むとやをしへられたりけむをくれてさくくらふた木そいとおもしろきあたらし  
うつくり給へる殿を宮たちの御もきの日みかきしつらはれたりはなはなとも  
のし給殿のやうにてなに事もいまめかしうもてなし給へり源氏の君にも一日う  
ちにて御たいめんについてにきこえ給しかとおはせねはくちおしうものゝはえ  
なしとおほして御この四位の少将をたてまつりたまふ

わかやとの花しなへての色ならはなにかはさらに君をまたまし内におはす  
るほどにてうへにそうし給ふしたりかほなりやとわらはせ給てわさとあめるを  
はやうものせよかし女みこたちなどもおいつる所なれはなへてのさまには思  
ましきをなどの給はす御よそひなどひきつくるひ給ていたうくるゝほとにまた  
れてそわたり給さくらのからのきの御なをしえひそめのしたかさねしりいとな  
かくひきてみな人はうへのきぬなるにあされたるおほきみすかたのなまめきた  
るにていつかれいりたまへる御さまけにいとことなり花のにほひもけおされて  
なかくことさましになむあそひなといとおもしろうし給て夜すこしふけゆく  
程に源氏のきみいたくゑいなやめるさまにもてなし給てまきれたち給ひぬしむ  
殿に女一宮女三宮のおはしますひむかしのとくちにおはしてよりゐたまへりふ  
ちはこなたのつまにあたりてあればみかうしともあけわたして人くいてゐた  
りそてくちなとたうかのおりおほえてことさらめきもていてたるをふさはしか  
らすとまつふちつほわたりおほしいてらるなやましきにいたうしひられて

わひにて侍りかしこれとこのおまへにこそはかけにもかくせ給はめとてつ  
まとのみすをひきゝたまへはあなわつらはしよからぬ人こそやむことなきゆか  
りはかこち侍なれといふけしきのみ給ふにおもくしうはあらねとをしなへて  
のわかうとともにあらすあてにおかしきけはひしるしそらたきものいとけふ  
たうくゆりてきぬのをとなひいとはなやかにふるまひなして心にくゝをくまり  
たるけはひはたちをくれいまめかしき事をこのみたるわたりにてやむことなき  
御方くものみ給とてこのとくちはしめたまへるなるへしさもあるましき事  
なれとさすかにおかしうおもほされていつれならむとむねうちつふれてあふき  
をとられてからきめをみるとうちおほとけたるこゑにいひなしてよりゐたまへ  
りあやしくもさまかへけるこまうとかなといらふるは心しらぬにやあらんいら  
へはせてたゝときくうちなけくけはひするかたによりかゝりてき丁こしに手  
をとらへて

あつさゆみいるさのやまにまとふ哉ほのみし月のかけやみゆるとなにゆへ  
かとをしあてにのたまふをえしのはぬなるへし

心いるかたならませはゆみはりの月なき空にまよはましやはといふこゑた  
ゝそれなりいとうれしきものから